

史料紹介

古宇田 亮 修

当研究所では、平成十七年度（二〇〇五）より社会福祉法人錦華学院に所蔵される東京感化院時代の史料の翻刻公開を開始した。本号はその八冊目に当たると。過去七冊においては、第七号を除き日誌史料を中心として翻刻を掲載してきた。本号もまた、明治三十七年から三十八年にわたる時期の日誌類三冊の翻刻を掲載するものである。

史料の翻刻作業については、従前どおり北都古文書研究会（会長齋藤博氏）に全面的な御協力を仰いだ。ここに銘記し、会員諸氏の変わらぬ御尽力に対し厚く御礼申し上げるものである。また本号の編集・版下作成は、筆者の担当になるものである。なお校正に際しては、三浦周氏（大正大学総合佛教研究所研究員）に御協力頂いた。ここに記して謝意を表したい。

〈史料51〉 日誌 教務課（明治三十七～三十八年）

一三一丁から成る和綴じ本であり、一三〇丁目まで記載がある。一二行書きの野紙が用いられている。記載期間は明治三十七年元日から、三十八年末日までである。但し、日付と天気のみで、本文がない日も含まれている。

記載者は、明治三十七年一月から三月一〇日までは中原栄治であり、三月一一日以降は全て高瀬紹卿である。内容としては、表題にもあるように教務課の日誌であり、〈史料22〉『日記 教務課（明治三十六年度）』（『東京感化院関係史料集（5）』所収）の後継となるものである。

〈史料52〉日誌 家族（明治三十八年一月起 第壹号）

二一四丁から成る和綴じ本であり、最終丁まで記載がある。一二行書きの野紙が用いられている。記載期間は、明治三十八年元日から一〇月一四日であり、紙数不足により、次の〈史料53〉に引き継がれている。記載者は不明であるが、その筆跡から河村淡江である可能性が推察される。内容としては『日誌 家族』という表題からも伺われるように、院生の動向が事細かに記されており、かれらの日常生活を知ることのできる史料である。

〈史料53〉日誌 家族（明治三十八年十月起 第貳号）

七〇丁から成る和綴じ本であり、最終丁まで記載がある。一二行書きの野紙が用いられている。記載期間は、明治三十八年一〇月一五日から明治三十九年一月二二日までである。〈史料52〉の後継であり、記載者ならびに内容に関して、それと同じである。

（当研究所主任研究員）